
見えない世界

密 麻容

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見えない世界

【Nコード】

N0375N

【作者名】

密 麻容

【あらすじ】

何かがいる。視線だけを感じる。しかも自分だけが感じている。

視線の正体は。

腕まで切るそのモノは。

そして最後に辿り着いた真実は。

ホラーというより不思議な感じです。

視線（前書き）

須賀由宇の視点です。由宇については他の話参照をお願いします。

視線

視線を感じた。

何度も、いろんな場所で、角度で、悪意の込もった視線を感じた。視線を感じる方向に目を向けても何も無い。監視されているような、覗き見されているような、嫌な視線が付き纏っていた。

「ストーカーなんじゃないの？」

「僕に？ それは無い」

あつさり否定すると、机を挟んで正面に座る名波咲良は口を尖らせた。

咲良じゃあるまいし。僕にストーカーは考えられない。

咲良は元モデルで、美形に分類される容姿を持っている。今は、中学を卒業したら芸能界に復帰するために、芸能事務所に登録している。

もしかしたら、咲良関係の嫌がらせか。

いや、それならこんなに不確かなものじゃない。教室内でこんな視線はあるはずない。

「そういうのじゃなくて。気持ち悪いというか」

呪いってこういうものかもしれない。じわじわと、自覚させて追い詰めていくような。自分が悪いのだと思いつまらせるような。

身体ではなく、精神に作用する。

「というわけで、学校以外では別行動でよろしく」

「はあ！？ なんでだよ！」

「なんでも」

不満そうな咲良を無視して決めた。

巻き込みたくなかった。飛び火がないとは言いつれない。

今だって、首の後ろに視線を感じている。

じつとりと、張り付くような視線は、神経を蝕んでいくようだった。

声が聞こえた。微かな声で、呼ばれた。
背中から首に駆け上がるように、寒気がした。

ぞわり、と撫でられるように。ぬめり、と舐められるように。粘着質な声が耳元で囁かれた気がした。

「聞こえて…いるのか？」

そう囁く声は、頭の後ろから聞こえた。咄嗟に鞆を振り回したが、手応えはなかった。

辺りを見回してみても何もない。人通りはなかった。

気持ち悪い。

視線だけじゃなく、声も。

視線は前より増えた気がする。複数の眼を感じた。それに伴って、悪意も増えている。

ピリピリと突き刺さるような感覚が、肌を刺激した。

なんでこんな目に。鈍感であれば良かったのか。気付かなければ幸せだったのか。

でも、知らなくても何かがそこにある。

「誰かいるんですか？」

返答はなかった。先程の声も答えなかった。息遣いさえも聞かない。

息をしないモノなのか。それは幽霊と言われるものなのだろうか。正体不明なのだから、近いものではある。

どうすれば。

頭が痛くなってきた。

「気付いているのは僕だけっぽいし」

思わず漏れた独り言に、空気が揺れた気がした。

頭の上から。背後から。

複数の目が見ている。

無自覚であったなら。こんな思いはしなくて済んだ。

「ッた！」

ピリツと走った痛みにも、腕を見た。

一筋の傷がある。それはすぐに見えなくなり、血に埋まった。だらだらと流れる血液。思ったより深く切れているようだった。かまいたち、という現象なのか。これなら通り魔の方がマシだ。通り魔なら実体がある。

一人で帰って良かった。ここに咲良がいたら、と思うと鳥肌が立った。

傷口をハンカチで押さえ、ズキズキと痛む腕をなるべく動かさないようにして病院へ向かった。

傷口

「久しぶりだな、由宇」

診察室のドアを開けると、甘い笑顔に迎えられた。

蒼井外科医。大きな怪我は全部市民病院で診てもらっていた。外科医は何人もいるのに、何故か毎回蒼井先生が担当だった。人気の医師なのに、毎回担当というのには違和感があつたが、自然と親しくなっていた。

「来ない方が良い場所でしょう。もう道場には行っていないませんし」

「まあな。大怪我なんて滅多にするもんじゃないしな。で、今回は…何だコレ」

傷口を見て、先生は眉を寄せた。

縫う必要がある傷だったため、すぐに麻酔を打たれ、麻酔が効くまでの間傷口を凝視された。

「薄い金属板で切ったような…何で切ったんだ？」

「わからないんです。何もないところで突然」

痛みを感じてから咄嗟に周りを見回したが、凶器になるようなものは何もなかった。血がついたモノもない。

だからこそ、かまいたちだと思った。

「とにかく縫うか」

先生は迷うことなく針を進めた。傷口は強制的にくっつけられていく。麻酔といい、容赦がなかった。

怪我は慣れているけど、痛くないわけではない。

「しばらく動かすな。お前が思っている以上に傷は大きい」

縫合は済み、最後に包帯を巻かれた。

包帯を見ると、大怪我をしたと自覚する。あの痛みの記憶が蘇った。

何も無いところで。

腕が切れていた。

「知り合いの医者に、友人に刑事がいる奴がいる。そいつにこのことを言っておくけどいいか？」

「はい。また同じことがあるかもしれませんし」

自分だけでなく他の人も被害に遭ったら。この程度じゃ済まないかもしれない。

右腕が鈍く痛んだ。

治療中もずっと視線は離れなかった。

「どうしたの!？」

帰って早々に大騒ぎしたのは弟の宙翔だった。母さんはいつもと変わらず穏やかに笑っていた。

右腕を胸の高さまで上げて、包帯がしっかり巻かれているのを確かめた。

「なんか切れた。かまいたちかなーって。蒼井先生に縫ってもらってきた」

「縫ってって…大丈夫なの!？」

まあ大丈夫じゃないな。

麻酔が切れてから、じくじくと痛んでいる。これほどの大怪我は久しぶりだから、余計に痛く感じるのかもしれない。

宙翔が騒いでいる中、母さんは穏やかに聞いた。

「一人で病院に行って帰ってきたってことは、心配は無用？」

「うん。骨折じゃないから、補助はいらない」

空手の練習で足を骨折したときは補助が必要だったけど、今回は普通に動かせる。

迷惑をかけたくなかった。たとえ家族でも。家族だからこそ。視線はずっと付き纏っている。

「由宇が怪我するなんて久しぶりね。かまいたちだと仕方ないけど」「明日も病院に行ってくるよ。一応原因不明の怪我だから」

平気だとわかるように笑みを浮かべた。笑顔でごまかされてはくれないだろうけど、追及はなくなる。

宙翔の何か言いたそうな表情に頭を撫でることでは、
おりに食卓に着いた。
突き刺さるような視線が痛かった。
いつもど

刑事

「昨日言った刑事」

「呉です。よろしくお願いします」

中学生に対して椅子から立ち上がり、丁寧にあやうする刑事に頭を下げた。

仕事早い。昨日の今日で刑事と対面することになるうとは。

蒼井先生はニヤニヤ笑っている。

「先生、お仕事は…」

「有休を取ってある。患者と警察に協力するなんて良い医者だろ？」
ただの興味本位なのに、理由は立派だった。呉さんは苦笑している。

そんな穏やかな雰囲気の中でも、視線は変わらず後ろから突き刺さっている。

「では早速、腕が切れた状況を教えてください」

「まず座ったらどうだ？」

蒼井先生は椅子を勧めた。僕はいつもの患者の椅子、呉さんは補助の椅子に座った。

「どうぞ」

「いきなり痛みを感じて腕を見ると、切れていました。すぐに辺りを見回したんですが、凶器となるようなものはありませんでした。蒼井先生が言われた薄い金属のようなものも。上から下に走った痛みだったので、下に落ちていないか探したんですが…」

空気が揺れた気がした。

まただ。また何かが動揺したように揺れた。

二人は気付いていないのか、動きはなかった。

「何か変わったことは？」

「腕が切れる前に、声が聞こえました。『聞こえているのか？』と「声？」」

そんなこと聞いてないぞ、と不満そうに小さく呟いた蒼井先生に、聞かれていませんから、と表情で応えた。

表情だけでどれだけ正確に伝わったかはわからないが、蒼井先生を無視して話を続けた。

「耳元で聞こえました。男性だと思います。近くに人はいないのは、警戒していたんで間違いないと思います」

「声、か。近くに人はいなかったのに、耳元で声…。他には？」

他には。今も続いている異変。呉さんたちが気付かない、視線。

「視線を感じるんです。ずっと、どこにいても」

「視線？ 今も？」

「呉さんの頭の上の方からと、僕の右ななめ後ろから」

呉さんと蒼井先生は指差した方を見た。

そこには何も無い。何も無いから異常なんだ。

視線だけを感じる。

「何もないな」

「何も無いのに視線…蒼井先生は感じますか？」

「いや、全く」

呉さんの問い掛けに蒼井先生はあつさりと答えた。

やっぱり。僕しか感じられていない。

ふと、呉さんは辺りを見回した。

「…微かに何か感じるんです。どこからかは特定できないんですが、見られてるような気はしていたんです」

呉さんの呟きに、思わず身を乗り出した。

自分以外にも視線を感じる人がいる。つまり、気のせいなんかではなかった。

自分は間違っていないかった。

また空気が震えた気がした。

「幽霊とかそんなのか？」

「今まで見たことありませんから、違うのかさえわかりません。須賀くんはどう思う？」

「僕も幽霊を見たことはありません。　：今感じている視線は、悪意を感じますが、危害を加えるような感じはしないんです」

ただ見ている。

それだけだった。

そこに悪意があるのは、見ていることに僕が気付いているからなのかもしれない。

「でも、腕を切られた」

「同じものじゃないかもしれませんが」

視線とかまいたちは、同じものかわからない。

同じでないならば、不可思議なものが増えたことになる。

蒼井先生の的確・迅速な発言に思考がまとまっていく気がした。わからないまま終わらせたりはしない。

会話が途切れ、呉さんはおもむろに溜息混じりで言った。

「とにかく調べてみますね。　：もしかしたら、俺を呼んで当たりだったかもしれません」

「心当たりがあるのか？」

「いえ、こういうのが得意な知り合いがいるだけです」

期待しないでください、と続けた呉さんに対し、頭を下げた。

今までのゼロの状態よりかなり良い。理解してくれているだけでなく、解決策を持っている。

顔を上げて、蒼井先生に向き直った。

「有難うございました。治療だけでなく、呉さんを紹介していただいて」

「ただの好奇心だ。解決したら、後で全部話してもらうからな」

蒼井先生の押し付けがましくない親切に、僕と呉さんは頷いた。

その後、呉さんと携帯番号とメールアドレスを交換し、病院で別れた。

視線はどこまでも追ってくる。

正体

「呉さん？」

校門前で呉さんが立っていた。見た目はただの20代後半の男性であるため、生徒は一応目を止めるも素通りしている。

まだこちらには気付いていないようで、小走りで近寄った。

「こんにちは」

「こんにちは。待ち伏せして悪かったかな」

淡々と話す口調のせいで心情は掴みにくかったが、配慮はあった。確かに校門で待ち伏せされると明日クラスメイトからの質問が予想される。でも、そこまでして伝えることがあるというのがわかった。

「いえ。何か急ぎの用ですか？」

「原因がわかった。確認するためにも、人目のないところに行こう」
昨日の今日で。呉さんも蒼井先生同様に仕事が早かった。

これで視線から逃れられる。

これで、終わる。

視線が揺れた気がした。警戒するような、離れようか迷っているような。

「ここならいいかな」

呉さんは廃工場の敷地に入って足を止めた。

周りに人気はない。日が落ちるのが遅くなってきたが、見事に人通りはなかった。さすが廃工場。不気味に朽ちているため、不良さえいなかった。

「須賀くん、視線を感じる場所を鞆で殴ってみてくれないかな」

呉さんの指示に素直に従った。

今なら届く位置にある。もっと上に行かれたら、手が届かなくなる。視線を感じる空間に思い切り鞆を振った。

「ちよっと鞆を貸してくれないかな」

振り切った反動を抑え、教科書の詰まった鞆を呉さんに渡した。

呉さんは叩いた面に手を置き、慎重に撫でた。

何かを探すその仕様に、声を掛けられなかった。

「あつた」

何かを摘んでいるようだったが、見えなかった。親指と人差し指で作られたCの形。その間をどの角度で見ても何も無い。間は3センチくらいで、小さい。

「これは見えないよ。だからこそ、視線だけを感じる」

なるほど。こちらを見ている物が、こちらからは見えない。だから、視線だけを感じる。

摘めるなら、そこには何かがあるはず。Cの開いた部分に人差し指を当てた。

「うわ……」

確かに何かある。

硬くて冷たい。ゆっくりと指を滑らすと、薄い羽のようなものに触れた。

「この薄さ……」

「そう。この羽が君の腕を切ったんだ。飛んでいるときだったら、勢いでスパツと」

そつと腕の包帯に触れた。この傷は、ここにある見えない何かで負ったものだった。

こんなに小さいのに、あの殺傷力。こんなものがあと何個あるんだろう。

視線の数以上はあるはずだ。

「これはね、監視カメラなんだ。飛行型のね。光を反射しない素材で、見えないようになってる。こちらからは見えないけど、これは僕たちを見ている。だから、君は視線だけを感じた」

呉さんは、摘んだモノを鞆から取り出した箱に入れた。手の平に収まる大きさの箱は金属製で、これなら壊れないだろう。

視線の正体を知っていたかのようなその箱を、じっと見た。それ

に気付いた呉さんは、苦笑した。

「君を話を聞いて、思い当たることがあってね。知り合いに聞いてみたら、テスト飛行してるって言われたんだ。君が視線を感じたことや、怪我したことを言ったら、一時中止するって。回収は明日になるから、今日のうちに君に見せたかったんだ」

見えない監視カメラ。それが街に溢れている。

ずっと見られていた。

家の中にも侵入したそれは、プライベートまでもを見ていて。

「家の中まで監視するなんて…何をしたいんですか？」

「犯罪抑止だよ。まあ、家の中に入るのは限られてるけどね。ちなみに一般公開はしない。だから、犯罪を見つけたら正規の手続きで証拠を集めるんだ」

あの悪意の視線が正義の味方だったなんて。

いや、僕が気付いていたから悪意が籠ったのか。

とにかく正体は判明した。危険は取り除かれた。咲良は関係なく、やっと安心できた。

「蒼井先生にはなんて説明しましょう？」

「そのままを報告するよ。あの人は隠してもわかってしまうだろうし、隠す必要もないからね」

呉さんから言ってくれるようで助かった。こういう説明は苦手だった。

誰かを悪者に行っているような。自分を正当化しているような。被害者からの説明は、主観要素が混じってしまう。

「あと、今回の件に関しては、それなりの賠償はさせてもらうからね。治療費及び慰謝料をきちんと請求するように」

「治療費だけで…」

「家まで入られてたようだしね。許しては駄目だよ。君が請求しないなら、俺が相当額を請求しておくから」

呉さんの厳しい指摘に、頷くことで答えた。

僕だけの判断で済ませてはいけない。あの監視は、慰謝料を請求

するに値する行為だったんだ。

それなら、呉さんに任せよう。

「じゃあ、帰ろうか。送っていくよ」

「はい。有難うございます」

全部引つくるめて深くお辞儀をして礼を言つと、呉さんは無表情を苦笑に変えた。

可笑しいことを言つたかな。

「今回君は被害者だろう。警察を悪く言つても良いのに」

「いえ：最初は幽霊かな、と思つていたので、被害者とは思えないんです」

「幽霊、か。確かに、四六時中付き纏う視線は似ているかも」

呉さんは金属の箱を乱暴に振つた。

カシャカシャ音がするから、その中には確かに何かが入っている。見えない何か。監視する見えないモノ。

ホラーは現実感を伴つて、正体不明のままに解決した。

「あ、今度ソレを僕の周りで見かけたら、叩き潰しますから」

全部解決した後に考えてみると、僕は何も悪くない。なら、次からは容赦なく排除する。

そう言つと、呉さんは笑い声を押し殺して満面の笑みで頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0375n/>

見えない世界

2010年11月14日22時25分発行